

抄 録

第58回 信州リウマチ膠原病懇談会

日 時：平成27年10月24日（土）

会 場：キッセイ文化ホール国際会議室 3 階

当番幹事：山崎 秀（社会医療法人抱生会丸の内病院リウマチ膠原病センター）

一般演題

1 集中治療を要する重症心不全で発症し、ステロイドが著効した SLE の 1 例

信州大学脳神経内科，リウマチ・膠原病内科

○市川 貴規，尾澤 一樹，吉長 恒明

岸田 大，下島 恭弘 ほか

【症例】42歳女性。前医入院20日前に下腿浮腫と食欲不振あり，その後浮腫は徐々に増悪。呼吸困難が出現し近医病院を紹介受診，左室駆出率15%と著明な左心機能低下を認め緊急入院した。心不全管理目的に当院救急科転院。受診時，四肢浮腫と著明な胸水貯留を認めていた。経過中呼吸状態の悪化によりIABP挿入，人工呼吸器管理に至った。後日免疫学的検査にてSLEと診断。ステロイド大量療法により胸水は速やかに消失し心機能も回復。第87病日に退院した。

【考察】SLEに伴う心筋炎はかつては剖検例で多数認めていたが近年はステロイド治療により減少した。更に初発症状で心筋炎を呈した本例は稀である。病態としては心筋への炎症細胞浸潤と免疫複合体の沈着でありステロイド治療が奏功する。【結論】IABP挿入，人工呼吸器管理を要する重症心不全で発症したSLEの1例であったが，早期からのステロイド治療が奏功した。本症例のようにリスクファクターの無い若年例の急性心不全では，鑑別疾患としてSLEも考慮する必要がある。

2 アバタセプト投与を契機として発症した乾癬様皮疹の 1 例

信州上田医療センター整形外科・リウマチ科

○中田いづみ，森 直哉，眞野 洋彰

山本 宏幸，赤羽 努

77歳女性。関節リウマチ（以下RA）歴13年。Steinbrocker分類stageⅣ，class2。メトトレキサート内服するも効果不十分であったため生物学的製剤を導入した。エタネルセプト，インフリキシマブと使用するも

二次無効であった。アバタセプト（以下ABT）点滴注射に変更した所，RAの治療は奏功した。開始2カ月後に皮疹と掻痒が出現，皮膚生検で乾癬と診断された。皮疹と掻痒が増強しABT点滴注射を中止した。中止後，皮疹と掻痒は軽快したが，一方でRAが再燃した。本人の希望もありABTの皮下注射に変更開始，RAの治療は奏功したが，開始2カ月後，再度，乾癬様皮疹と掻痒が出現した。しかし，ABT点滴注射と比較し症状が軽く抗アレルギー薬内服とステロイドの外用薬の併用にて，現在もABT皮下注射を継続している。ABT投与にて掻痒，皮疹が出現した場合は乾癬様皮疹も念頭に置いて診療にあたるべきである。

3 RAのPIP関節炎と酷似した皮膚疾患の存在—Pachydermodactyly

元の気クリニック

○野口 修

伊那中央病院皮膚科

福澤 正男

14歳のPachydermodactylyの1例を報告した。2カ月前より，両側の母指を除く8本の指のPIP関節のリウマチ様外観を主訴に来院。PIP関節の背面視では紡錘状外観を呈したが，同関節部に圧痛，運動痛なく，自発痛もなかった。腫脹は関節の背面にはなく，両側面に斑状，丘疹状にみられ，境界鮮明で全体に淡く発赤がみられた。きわめて特殊な滑膜炎の可能性も一概に排除できないと判断され，エコー検査とMRI検査が行われたが，関節内には何ら異常なく，皮下病変であることが判明した。生検にてPachydermodactylyであることが確定した。

Pachydermodactylyは10代の男子に好発するきわめて稀な疾患とされているが，痛みや機能障害がないため，訪医しないケースも多いのではないかと推測されている。誘因は機械的な皮膚への刺激が想定されるが，稀であることから，遺伝的素因の関与が大きい可

能性がある。また、初めての報告が1973年と比較的新しいことから、社会の近代化に伴って新たに出現した環境要因がからんでいる可能性も否定できないと思われる。

4 炎症パラメータとしての α 1-グロブリン一予備的報告

元の気クリニック

○野口 修

RAの病状経過は生物学的製剤の出現で大きく変容したが、とくにトシリズマブの登場では容易にCRPの産生が抑制されるため、血清CRP値が測定限界以下となることがしばしば起こる。このため、感染症に際してfalse negativeも含めてCRP値が十分上昇せず、CRP値の炎症パラメータとしての機能が十分に発揮されないことが問題視されてきた。そこで、蛋白濃度として理論上ゼロになりえない血清蛋白電気泳動で求める蛋白分画の1分画である α 1-グロブリン半定量値を取りあげ、トシリズマブ投与例での変動を1例ではあるが、CRP値と比較して検討した。 α 1-グロブリン値は0.10~0.22 g/dlが正常値とされるが(「今日の診断指針」, 医学書院), 私の経験上、特異度、感度ともきわめて良好である。

α 1-グロブリン値の変動はSAA値や関節点数(DAS-28の方法に準拠)とよく相関として変動し、CRP値とはそれが測定限界以下となることがしばしばあったため、きれいな相関はみられなかった。このことは α 1-グロブリン値がRAの炎症病態をみるパラメータとしてCRP値より有用である可能性を示している。

5 関節リウマチの足部障害とADL

長野赤十字病院リウマチ科

○松原 浩之, 林 真利

【目的】近年の薬物治療の進歩により関節リウマチ(RA)の関節破壊の抑制が可能となってきたが、罹病期間の長い症例では関節破壊がすでに進行してそれによるADL障害が見られている。RAの代表的な障害である足部変形とADL障害について検討を行った。

【対象と方法】罹病10年以上のRA患者で足部について調査可能であった21例を対象とした。年齢は 68.2 ± 10.6 歳, 罹病期間は 22.5 ± 10.1 年。足部機能については日本足の外科学会RA足部・足関節判定基準(JSSF RA foot ankle scale: 以下JSSF-RA)を

用いて評価を行った。足部変形の程度をみるため単純X線による外反母趾角(HV角), M1M2角, M1M5角を測定した。ADL障害についてはHAQ-DIを用いた。

【結果】調査時のDAS28-CRPは 2.55 ± 1.00 と比較的疾患活動性はコントロールされていた。JSSF-RAは 78.3 ± 20.4 点/100点, HV角は $35.0 \pm 17.3^\circ$, M1M2角は $11.7 \pm 4.8^\circ$, M1M5角は $32.0 \pm 7.3^\circ$, HAQ-DIは 0.38 ± 0.45 であった。HAQ-DIとJSSF-RA, M1M2角との間にそれぞれ相関を認めた($r = -0.7853, 0.5722$)。

【結論】疾患活動性がコントロールされ著しいADLの低下は認めていないものの、足部障害はADL低下と関連することが示唆された。

6 人工MCP関節全置換術の1症例

飯田整形ペインクリニック

○飯田 泰人

【はじめに】今日、関節リウマチの病態はメトトレキサートと生物学的製剤の普遍的普及により曾てとは大きく変化した。2002年、「治療機会の窓」の概念が提唱され、これら薬剤の病初期からの投与により、関節リウマチによる関節変形や機能障害はほとんど見られなくなった。しかし、それ以前に罹患した患者様は未だ様々な変形や機能障害を来したままである。このたび、右手示指、中指MCP関節の変形に伴う機能障害に対して人工MCP関節全置換術を経験したので報告する。

【対象とリウマチ歴】患者は罹患より30年経過したStage4, Class2の関節リウマチの方。

2010 当院初診, MTX 6 mg/week, PSL 5 mg/day, DAS28 (ESR) 2.41

2010.4 Adalimumab 40 mg 開始

2010.10 DAS28 (ESR) 0.68

2011.2 Instrumental operation in lower lumbar spine

2011.4 DAS28 (ESR) 2.44, dose up to MTX 8 mg

2011.6 DAS28 (ESR) 1.11

2011.9 Crash in L1 spine

2012.5 Suture of rt. ext. proprius minimi

2013.12 Clayton's op. in rt. 4th and 5th metatarsus
Since the beginning in 2013, she was no longer able to grasp object, pinch coin and

bill, put a button, fit a zipper and tie shoe lace in right hand.

2013.1 TFA in MCP joints of right index and middle finger

【人工指関節】MCP 関節側副靭帯を温存しつつ表面置換する FINE Total Finger System を用いた。

【結果】機能障害を呈した右手示指・中指 MCP 関節に FINE Total Finger System を用いて TFA を行い良好な結果を得た。Swanson Artificial Finger Joint と比較検討した。生物学的製剤出現前の TFA の長期経過は悲惨だった。

7 関節リウマチ患者に発症した悪性リンパ腫と MTX 関連リンパ増殖性疾患の検討

社会医療法人抱生会丸の内病院

リウマチ膠原病センター

○山崎 秀, 高梨 哲生

【目的】当科で経験したりウマチ関連リンパ増殖性

疾患 (RA-LPD) について検討した。

【症例】RA-LPD は10例, 平均年齢72.4歳, RA 罹病期間16.5年で, メトトレキサート (MTX) 投与患者 8 例, MTX 非投与患者 3 例であった。

【結果】MTX 中止にて改善した MTX 関連リンパ増殖性疾患 (MTX-LPD) は 5 例で 4 例は MTX 中止にて病変は消失, 1 例は縮小するも遷延化したためリツキシマブによる治療が行われた。MTX 中止にて改善なかった例は 3 例 (死亡例 1 例) であった。MTX 非投与例は 3 例で, そのうち 1 例は MTX-LPD 治癒後トシリズマブ治療中に悪性リンパ腫を発症した。

【考察】RA-LPD の RA 治療薬との因果関係はまだ明らかにされていないが, MTX が何らかの関与をしていることは明らかであり, リウマチ診療医はこれらの疾患が存在することを念頭に置き, 原因不明の発熱, リンパ節腫脹などがみられたら直ちに MTX 治療などを中止し原因検索を行うべきである。